
Song for Snow

清久 志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S o n g f o r S n o w

【Nコード】

N 3 6 4 5 Z

【作者名】

清久 志信

【あらすじ】

ユキとリツ。常に寄り添う二人の絆は、周りが認めるほど確かなものだった。

ゆきと貴久。不倫と取られかねない二人の関係は、とても曖昧で奇妙だった。

過去と現在の二組の男女と、それを取り巻く人々の歌で繋がる絆の物語。

#0 Snow Like Ash

空から舞い降りる白いカケラが、指先に触れて雫へと変わる。

眩しくもないのに目を細めて、ゆきは空を見上げた。

暗い色の雲を背景に、純白のはずの雪の華が薄汚れているようにすら見える。それは、花びらというよりも灰と言った方が相応しいように思えた。

いつかも、こんな風に空を見上げたことを思い出す。

その時にはもっと綺麗だったのにと、そう思ってから苦笑が零れた。

それはきつと、一緒に見上げる人の存在があつたからなのだと気付いたからだ。

純粹で、ひたむきでいられたあの頃。隣で笑う人の存在が、自身をそうさせていた。

何よりもその人が、雪のように清らかで柔らかで優しくかったから。そして、今の自分自身には『花びら』よりも『灰』の方がぴったりだと思えた。

「ゆき」

記憶に重なる声で呼ばれて、振り返る。しかし、そこに立つのは、その記憶の中にある人とは、全くの別人。

それでも、今この場にこの人がいて、こんな風に呼んでくれることが嬉しいとゆきは思っていた。

「何、見てるんだ？」

「……ゆき」

短い問いに、ゆきは少し考えてから簡潔に答える。

「そのままだな」

呆れたような、困ったような、どっちとも取れる笑顔で貴久は呟いた。それに応えるように、ゆきも口角を僅かに上げる。作り慣れてしまったその表情には、微かな苦味が自ずと混じった。

「ゆきの笑い方って、『ゆき』みたいだな」

唐突な貴久の評価に、ゆきは思わず小さく笑ってしまった。

「貴久さん、それってどんなの？」

「そのままだよ。触れた瞬間に消えそう」

そう言う貴久の微笑の中に、自分と同質のものを感じ取り、ゆきはもう一度空を見上げた。

きつと、『二人』はよく似ている。

そしてこんな風に雪花の舞う日には、二人揃って笑顔を作るのに苦勞をするのだろう。

「ほら、いつもでもこんなところにいたら風邪ひくぞ」

「うん」

貴久に促され、ゆきはゆるやかに一步を踏み出した。

その頬を、ふわりと生まれたての白雪が撫でてゆく。耳元で、懐かしい音が聴こえた気がした。

思わず足を止め、振り向いてしまう。

「どうした？」

「……ううん、何でもない」

広がる風景の先に、探している人がいるはずはない。

わかつてはいるのに、振り返ってしまった自分自身を嗤うように、

ゆきは静かに微笑んだ。

車に向かう二人を包み込むように、白銀の花がどこまでも優しく降り注いでいた。

#1 Sepia Daily Life

突然、ギターの音色が止まる。

それにつられるようにベースとドラムも止まり、歌っている最中だったリツも声を途切れさせた。

どうしたのかと誰かが訊ねる前に、ユキの視線がリツへと真っ直ぐに向けられる。

「リツ、今日調子悪い？」

訊いているような口調ではあったが、ユキの表情からは確信しているような色が窺えた。

リツは苦笑で誤魔化そうとしたが、ユキが軽く睨みつけると、それを断念するしかなかった。

「何？ リツちゃん風邪？」

「駄目だろ、無理してちゃ」

ベースのヨシノとドラムのシュウが、揃って心配そうな声を掛けるのに、リツは大丈夫だと首を振る。が、それを見ていたユキに、更にきつく睨まれて首を竦めた。

「大丈夫じゃないでしょ。何年リツと一緒にいると思ってんの？」

いい加減、その下手な嘘が通用するとは思わないで欲しいんだけど」

「けど、熱はもう——」

「問答無用。今日はもう終わり。家まで送ってくから」

そう言いながら、ユキはさっさと自分のギターを片付け始めていた。

こうなってしまったユキは、誰が何と言おうと自分の意見を曲げない。それはメンバー全員の知るところで、今のような状況ならば誰も逆らえるはずがなかった。

何故なら、ユキだけでなくリツの強情さも相当なものだからだ。

ここでユキを止めてしまえば、平気だと主張し続けるリツは倒れるまでやりかねない。

ヨシノは素早くリツの荷物をまとめると、それをユキの方へと差し出した。ユキは荷物を受け取ると、椅子の背もたれに掛けてあったコートをリツに向かって放る。

リツはそれを頭から被るようにして受け取った。

「リツちゃん駄目だよ。リーダーの言うことはちゃんと聞かなきゃね」

「そうそう。ユキ母さんは怒らせると後が怖いぞー」

ヨシノに合わせるようにシユウも続ける。ユキは何食わぬ顔で、自分も上着を着込み、荷物をまとめていた。

「二人してユキの味方がよー」

誰も自分の味方に回ってくれないことに、恨めしげにリツは文句を零す。

その額をこつんと小突き、ユキはリツを促した。

「ほら行くよ、リツ」

「お大事にねー」

「ビタミンCと睡眠とれよー」

「あーい」

ヨシノとシユウに見送られ、リツは半ば引きずられるように貸しスタジオの狭い階段を登る。

外へ出ると、まだ日が暮れる時間でもないのに、少し薄暗かった。見上げれば、ビルの隙間から見える空には濃いグレーの雲が厚くのさばり、太陽の光の多くを遮断していた。

「さむっ」

吹き抜ける朔風に、リツは思わず身を縮める。ハイネックのニットを着ていても、首筋をスカスカと風が通り抜けていくような感じだった。

コートの襟を立てて何とかやり過ごそうとするリツの首に、ユキは自分のマフラーを掛けてやる。

「バカリッ。風邪ひいてるならマフラーくらいして来なさい」

「馬鹿じゃねえよ。風邪ひいてるもん」

「自己管理の出来ないおバカだから風邪ひくの」

『馬鹿は風邪をひかない』という格言を主張するリツに、ユキは論理的な返答を返した。

しかし、リツはそれを聞いているのかいないのか、ユキを見て微笑に笑っている。

ユキは呆れて溜め息を洩らす、リツはただ、ユキがいかにもユキらしい答えを返すことが可笑しかったただだった。

そんな風に笑うリツの目の前に、ひらりと白い物が舞い降りる。

「あ、ゆき……」

「何？」

「ユキじゃなくて、雪！」

ああ、と納得したように、ユキは視線を頭上へと移した。リツも同じく、隣で空を仰ぐ。

暗い灰色の雲を背景に、幾つもの白いカケラが舞っていた。

それはまるで、ビルの高層からばらまかれた紙吹雪のよう。

「あ……、ユキ、ユキ！ 出来たっ！」

「は？」

「ほらほら！ この間ユキが聞かせてくれた新しい曲！ 歌詞出来た！ ってか、出来そう！」

興奮してまくし立てるリツに、ユキは啞然とさせられる。そして、しばらくすると実に大きな溜め息へと変化した。

「リツ、真性馬鹿でしょ」

「何がさ？」

心底呆れきった様子のユキの物言いに、リツは不満も露わに問い返す。

それに対して、ユキは超特大の溜め息をついてから、一息で返答した。

「風邪！ ひいてて練習切り上げたのはどこのどいつ！？」

「ここのこいつ」

リツは目の前のユキを指差しながら、しれっとした表情で答えた。

実際、練習を切り上げる指示を出したのはユキなので、リツの言いは間違っていない。

間違っではないのだが、

「……こんの、世紀末バカっ！」

ユキの怒りに触れないわけがなかった。ピシッとリツの額にデコピンが炸裂する。

あまりの痛みに、リツは額を両手で押さえてその場に蹲った。スタジオで小突かれた物とは比べ物にならなかったようだ。

「くうっ！ ユキ酷い！ 鬼畜！ サド！ オニー！」

「何？ リツ、一回じゃ足りないの？」

涙目で抗議するリツに、ユキはにつこりと笑みを浮かべた。けれど、その目はまったくもって笑っていない。

「いえ、結構です」

これ以上言うと、更なる悲劇が身を襲うだろうことを感じ取り、リツは引き攣りながら笑顔を作って短く答えた。

心底、リツはユキに逆らえないのだと自覚する。

一方ユキは、反省の色の薄いリツに、何度目かもわからない嘆息を洩らした。

「音楽バカ」

「ユキに言われたくないぞ、ギターバカの作曲バカ」

「歌バカ、作詞バカ」

『バンドバカ』

最後には綺麗に二人の声が重なった。それに顔を見合わせ、堪え切れないように笑い出す。

音楽が好きで、歌うことが好きで、作り出すことが好きで。

そんな大好きなことが目一杯できる、バンドという存在が、大切に愛おしい。

二人にとって、互いの馬鹿さ加減は理解しやすく、心地良かった。だからこそ、一緒に音楽をやっていけるのだ。

未だに座り込んでいるリツに、ユキは柔らかな笑みとともに手を

差し出した。

「まったく……。うちで書く？」

「おうっ！」

差し伸べられた手を取って、リツは立ち上がる。そして、その手を繋いだまま、二人は歩き出す。

触れている指先は、外気に晒されて冷たくなっていた。

「駄目だぞ、ユキ。ギタリストなんだからもつと指大切にしないと」
「だったら、リツももう少し喉を労わってね。たまには休めない」と
「歌ってないと、死んじゃうよー」

「バーカ」

口の悪さとは裏腹の笑みを含んだ声音に、自然と零れる笑顔。
いつものやりとりは、どこまでもいつも通りで、そのいつも通りさが嬉しい。

そんな時間と空間は、いつまでも続くと、そう信じて疑いもしない冬の日だった。

#2 Transparent Eyes

「ゆき、どこ行きたい？」

そう訊くと、ゆきは何か言いかけて、すぐにやめる。

いつも同じように何かを答えかけるのだが、数瞬後に返される答えは、きつと最初に言おうとしたものと違うのだろうと貴久は思っていた。

（ゆきの本当に行きたい場所は、どこなんだろうな）

そんなことをぼんやりと思いながら、横目でちらりと助手席のゆきを窺う。

案の定、ゆきは口を開きかけ、すぐに苦笑いでばやかし、視線を外へと移した。

「天気、いいね」

「夜から雨らしいけどな」

「そうなんだ」

後方に流れ去る景色を見つめたまま、ゆきは質問の答えとは違う呟きを洩らす。

ゆきが何を考えて、その言葉を発しているのか、貴久には判断がつかかねた。一緒にいる時間はそれなりに長いはずなのに、いつまで経ってもゆきは掴みどころがない。

「貴久さん」

「何だ？」

「海、行きたい」

「海？」

「ほら、もうすぐ夏だし」

そう、ふわりと微笑むゆきに、貴久の胸の奥がずきりと痛む。

ゆきの、この笑い方。

哀しそうな、切ないような、ここではないどこかを見るような瞳。初めて逢ったときから、ゆきはこんな風な笑顔を時々見せた。

そして、その諦めに囚われたような瞳に、『ゆき』みたいだと思っただ。

約一年半前。

派手な水音が耳に届いた瞬間、やってしまったと貴久は思った。店までの道の途中、アスファルトの舗装が悪く、雨が降ればいつも大きな水たまりを作る場所がある。歩道も狭く、気をつけて通らないと、歩行者に盛大に泥水を被せてしまうことになるのだ。

それを重々承知はしていたのだが、その時は少し油断をしていた。こんな時間には滅多に人通りがないからと。

更に言うと、突然かかってきた仕事の電話に気を取られていたことも大きい。

「悪い！　また後でかけ直す！」

早口で電話の相手に告げ、携帯を放り出す。すぐさまハザードを出して、車を道路脇へと寄せた。

「ごめん、大丈夫！？」

慌てて車を降り、被害者の元に駆け寄る。

二十代前半だろうと思われる、小柄な女の子だった。突然車から現れて声をかけた貴久に、その少女は何故かひどく驚いたような顔をしていた。

「うわ……、これはヒドいな」

それ以外の言葉が出てこないくらい、無残な状況になっていた。

少女の着ていた真っ白なはずのコートは、泥と排気ガスの色に染まっている。運の悪いことに、どこかの車が漏らしたオイルまでついていた。クリーニングに出しても、綺麗に落ちるかどうかわからないところだ。

「大丈夫、です」

予想外にも、少女は穏やかに微笑んだ。少し小首を傾げ、ふわりと。

その表情に、貴久の鼓動が大きく跳ねる。

今にも儚く消えてしまいそうな笑みに、心の中がざわめき立つのがわかった。

「い、いや、大丈夫じゃないと思うよ」

何とか気を取り直し、貴久は続ける。

暗くてわかりにくいのが、少女の服は汚れている以上に激しく濡れていた。

冷え込みはこれから余計に厳しくなる時間なのに、濡れた服のままで歩いていては、風邪をひいてしまうことは間違いないだろう。

それに、こんな夜中に女の子を一人歩きさせるといっただけでも十分に危険な気がした。

「乗って。君の家まで送っていくから」

「え、でも……」

「大丈夫、変なことしようとか考えてないから。これでも一応新婚ほやほやだし」

少女を安心させようと、左手をひらひらと振って見せる。その薬指には、まだ真新しい光を放っているシンプルなデザインのプラチナリング。

それを確認して信用してくれたのか、少女はこくりと小さく頷いた。

貴久は安心して一息つくと、後部座席のドアを開け、置いてあった紙袋からタオルを一枚取り出した。これから自分の店に持っていくつもりだったものだ。

「とりあえず、これ使って。洗ってあるから綺麗だし」

「ありがとうございます」

タオルを差し出すと、少女はか細い声で礼を述べ、それを受け取る。

貴久は助手席のドアを開けて、少女を促しながら、問い掛けた。

「家、どの辺？ あ、それと名前……」

「ユキ」

「え？」

ぽつりと呟いた少女の声に、またも心臓が大きく脈打った。
少女はそのまま視線を頼りなく彷徨わせ、暗い夜空を見上げている。その視線の先を追って辿り着いたのは、舞い始めたばかりの白い花。

それに貴久は、少女が名を名乗ったのではなく、降り出した雪のことを言ったのだと思った。

「ああ、やっぱり降ってきたか。ますます早く送っていかないとなほら、乗って乗って、えーっと……」

「ゆき」

もう一度、今度は貴久に向かってそう告げる少女に、貴久は考えを改めた。

「あ、ああ、ごめん。『ゆき』って名前のことだったんだ」

なんとという偶然なんだ、と胸中と思うが、貴久はそれを表情には出さずに謝罪する。

苦笑混じりの貴久に、ゆきは少しだけ目を細めた。

それがまた儚くて、名前の通り『ゆき』のようだと思えた。

寒い寒い二月の、深い夜の出会いだった――。

#3 Coral Dream

リツとユキの関係について、ヨシノはつくづく不思議な二人だと思っていた。

二人は幼なじみなのだと言っている。保育園の年少組から中学一年生まで、ずっと同じクラスだったそう。

もっとも、リツたちの地元はかなり田舎で、小学校には各学年一クラスしかなかったそうだから、そんなにすごいことでもないらしい。他にも同じような友人は何人かいるとのことだった。

高校では同じ学校に通ってはいたのだが、クラスは離れ、疎遠になっていたらしい。

だからあの日、偶然再会するまでは連絡も全く取っていなかった。それどころか、同じ土地の大学に通っていたことすら知らなかったそうなのだが――。

「もののすっごい、ナチュラルなんですけど……」

スタジオで、パイプ椅子に後ろ向きに跨って、誰に言うでもなくヨシノは呟いた。

視線の先には、新しい曲について話し合うリツとユキの姿。二人はヨシノの呟きにも気づかず、熱心に話を続けている。

「ここ、少し歌いにくいんだけど、キー変えていい？」

「え？ 変えるの？ リツなら歌えると思ってそうしたのに」

「あのねえ、ワタクシの楽器はナマモノよ？ ユキのギターと一緒にしないでくれる？」

「あれ？ そうだったっけ？ てっきり、この辺にゼンマイが付いてるか……」

「付いてるかいつ！ って、もし付いてたら、オルゴールみたいに音外すことなくて便利かも」

「オルゴールってキャラじゃないでしょ」

「うるせえっ！」

どう見ても夫婦漫才だな、などと思いつつ、ヨシノは二人のやりとりを黙って見守った。

そう。長い間離れていたわりに、再会した直後からこの二人はこんな風だったのだ。

再会した瞬間には、ほんの少し張り詰めたような空気を漂わせていたのに、二人きりで何か話して戻ってきた時にはこうだった。

まるで、離れていた間の時なんてなかったかのように。

（さて、いつものパターンなら、そろそろ漫才終了なんだよね）

毎度見慣れた光景は、いつも決まって同じような展開で幕を閉じる。

今日もその予想に違わぬ結末へと、確実に向かっているようだった。

「音階なぞる、綺麗なだけの歌なんかいらないよ。それじゃリツに歌ってもらってる意味がないでしょ？」

ふわりと、ユキがリツに向かって極上の笑みを浮かべる。

リツはそれに照れたように頬を掻いて、けれど嬉しそうに微笑う。

「ユツキーって、もっとクールビューティーだと思ってたのに、実は天然タラシだなー」

「あれは、アイツにだけだろ」

いつの間に戻ってきたのか、シュウがヨシノの隣で呟いた。持っていた袋の中からコーヒーを一本取り出し、ヨシノに差し出す。

今日はシュウがジャンケンに負けたので、コンビ二まで使い走りにされていたのだ。

「さんきゅ。そだねえ、リツちゃんにはベタ甘だもんねえ。でも、付き合っていないんだよ、あの二人」

「らしいな」

ヨシノの言葉をあつさり肯定するシュウに、思わずその長身を振り仰いだ。シュウもその事実を知っているとは思わなかったのだ。「ユツキーに訊いたの？」

「いや、リツオ。たまたま二人で話してたときにな。ヨシノはアイ

ツにストレートに訊いたんだって？」

「だって、付き合ってるようにしか見えなかったんだもん。だから、『いつから付き合ってたんの？』って……」

ヨシノの問いに、リツは付き合ってたなんかないと苦笑したのを思っている。そして、その後に付け加えた。

「今は歌うことが一番好きだから」と。

その答えに、ヨシノは啞然とさせられた。

間違はなく、リツはユキを好きはずだ。それは誰の目からも明らかほど。

けれど、それよりも歌うことの方が大切だと言い切ったのだ。

「ユキも似たようなことを言ってたよ。似た者同士なんだよな、あの二人」

「そっか。だったら、ほっといてもそのうちくつつくか」

「違うない。さて、おーい、律野夫妻ー！」

シュウがからかうように笑って、話を終えたらしい二人に呼び掛けた。

「誰が夫妻だ、誰が！」

怒ったように見せて、実は照れているだけのリツがひどく可愛らしい。

そう思ったのはヨシノだけでなく、シュウも、そしてもちろんユキも、優しい眼差しで見つめていた。

「怒るなって。ほら、ミルクティー」

「あ、シュウ、ありがとなー」

缶ジュース一つで簡単に懐柔されているリツに、シュウは単純だなと苦笑しつつ、ユキにも残りの一つを差し出した。

「どういたしまして。ユキはブラックで良かったよな？」

「サンキュー。ちょっと休んだら、さっきの続きしようか」

「リツちゃんもユッキーもそんなに休んでないじゃん。あと十分は休憩しようね」

ユキもリツも妥協できない性格だから、練習が始まると根を詰め

過ぎる傾向がある。こうやって、時々ブレーキをかけてやる事が自分の役目だと、ヨシノは密かに思っていた。

リツがヨシノに微笑みだけで返す。ユキも、自分たちへの気遣いに気づき、苦笑混じりにOKと呟く。

ヨシノの想いは、確実に二人に届いて、返ってくる。

リツとユキの笑顔に、ヨシノはしみじみと喜びを噛み締めた。

それは、このバンドが今のメンバーになってから、何度目かもわからないくらいに感じる想い。

リツもユキもシュウも、ずっと一緒にやっていきたいと、心の底から思える仲間だった。

特にリツは。

リツには、本当に救われている。

自分自身がもつとも苦しんで、何もかも捨て去ろうとしたとき、それをとどめてくれたのがリツだった。

リツがいなければ、今の自分はいなかったのだ。

ヨシノはそっと、左手のブレスレットに右手を添える。

リツが誕生日にくれた、レザーとシルバーで出来たそれに、感謝の想いと、これからの未来への願いを込めて――。

#4 Irritative Smile

金曜の夜は、客が多い。

アルコールを扱う多くの店では共通した事柄だろう。

この日の『Anastasia』も、例外ではなかった。

「トエ、これ5番さん」

「了解」

カウンターに置いた料理を、慣れた手つきで運んで行く後ろ姿。小柄で華奢な体つきの割に、よく動き、よく働く彼女の顔には、いつも穏やかな笑みが浮かべられている。

榎野はそんな彼女――戸枝ゆきを見て、疑問に思うことが多々あった。

「トエちゃんは今日も頑張ってるねー」

カウンター席を陣取る常連の早川が、同じようにゆきの働く姿を眺めながら、感心したように呟く。それに榎野は溜め息で応えた。

「働くのが好きとか言うてましたけどね。ホンマ物好きやわ」

「おまえももつと見習えよ。トエちゃん、どんだけ疲れててもあの笑顔だぞ？」

早川の指摘する通り、榎野はゆきの笑顔以外の表情をほとんど見たことがない。

それは接客業に携わる者としては確かに見習うべきものではある。しかし、榎野はそんなゆきの笑顔を見ていると、苛々することしきりだったのだ。

「榎野ももう少し笑顔ってもんを身につけたらどうだ」

「可愛いお姉さんにやったら喜んで」

「客を選ぶなよ」

呆れる早川に、榎野はニツと口の端だけで笑ってみせた。それを目にした早川は、少しばかり顔を顰める。

榎野の笑顔は、ゆきのようにほっと心を和ませるものではなく、

どこか不適で不遜に見えたからだ。

「前言撤回。客減るからやめとけ」

「ハヤさんが笑え言うたくせに」

ひどい言われ様だと抗議する榎野に呆れたような苦笑を零し、早川はカウンター奥のバックルームを覗きこむように窺う。

その表情から、早川が誰を気にしているのかはすぐに察することができた。

「店長なら、今日は休みやで。締めは俺がやるように言われとるし」
「あ、そうなのか」

榎野の先回りした答えに、早川はひどく落ち着かないような、居心地の悪そうな、そんな態度だった。

その原因に心当たりはあったのだが、あえて気付かぬふりで榎野は話を続けた。

「ハヤさん、店長に何か話あったん？」

「ん……、話っていうか、まあ、何だ……」

歯切れの悪い早川の視線が、ほんの一瞬ホールを歩いているゆきに向けられた。

それに、やはりと思いながら、声のトーンを少し落とす。

「トエとのこと？」

「榎野、おまえ……」

「知つとるよ、あの二人のことは。トエも俺が知つとるってわかつとる。ハヤさん、どこかで一緒のとこ見たん？」

早川は軽く頭を抱え、自らを落ち着かせるようと、クールマイルドを取り出した。銜えたそれに火をつけると、溜め息と同時に紫煙を吐き出す。

「仕事の出先だ。だから理恵子さんに見られるようなことはないだろうけど」

「なら、ええやん」

「ええやんって、おまえな」

「まあ、とにかくちょっと、ほっとたつて。俺も何とかせなアカ

ンとは思つとるから」

有無を言わせぬ口調で、その話を終わらせる。早川はなおも何か言いたげだったが、客からの注文を受け取ったゆきが戻ってきたため、断念せざるをえなかった。

（悪いなあ、ハヤさん）

ゆきが伝えに來た注文を受け、厨房で材料を軽やかに刻みながら、心の中で謝罪をする。

できれば、理恵子以上に早川には知られたくないと榎野は思っていたのだ。

それは、早川のゆきを見る視線の所為だった。

早川はゆきに好意を抱いている。さすがに目の前で口説こうなどとはしないが、来店する度にゆきを気にかけているのは明らかだった。

だからこそ、ゆきと貴久の関係は知られたくはなかったのに。

こつそりと小さな嘆息を洩らし、手早く作り上げた料理をカウンターへと持っていく。

「は、7番さんのサラダ」

「了解」

変わらぬ笑顔で受け答えするゆきの背中を見つめながら、閉店後を思つて少しばかり気が重くなる榎野だった。

最後の客を見送り、表の看板を照らすライトを落として、ゆきがカウンター前まで戻ってくる。その目の前に、榎野はコーヒーカープを差し出した。

「ブラックでよかったやろ？」

「気が利くね、まつきー」

「ええ男やる？」

「自分で言わなきゃね」

榎野の本気と冗談半分半分の言葉に、ゆきは楽しげな笑いを零し、

カウンターチェアに腰掛ける。仕事中よりいくぶん素に近いけれど、それでもどこか感情が伴っていないように感じる笑みだった。

その笑顔を見つめながら、榎野はいつもと変わらぬ調子で話を切り出した。

「ハヤさんが、トエ見たって」

「へえ。どこで？ 声かけてくれればいいのに」

「そら無理やろ。店長と一緒にいるんやから」

ピタリと、コーヒーを口元に運ぶ手が止まる。が、すぐに思い直したように、そのままカップに口をつけた。少しだけ苦そうな表情は、コーヒーの所為だけではないだろう。

「そつか。早川さんに知られちゃったか」

ぽつりと呟く声に滲む色で、ゆき自身も早川には知られたくないと思っていたことが窺える。

「おまえさ、そろそろやめた方がええんとちゃうんか？ 店長と付き合っとなかて、何もええことあらへんやろ」

ゆきがこの店の店長である貴久と付き合っていると知ったのは、三か月ほど前。

たまたま店が休みだったその日に、貴久とゆきが二人でいる姿を遠出した先で見つけた。

人目を気にするように地元から離れた場所で会っている二人に、当然疑問を覚えた。それと同時に怒りに似た感情も。

貴久は既婚者だ。そして、その妻である理恵子は榎野の従姉にあたる。

世間的に見たらどうしても不倫にしか見えない二人の関係は、榎野を不愉快にさせるに充分だった。

ただ、一つだけ腑に落ちなかった。

貴久は傍から見てもわかり過ぎるほどに理恵子を大切にしているし、不倫できるような性格でもない。

ゆきにしても、掴みどころはないのだが、火遊びするようなタイプでもなく、スリルを求めるような性格でもない。

何より、二人の間には男女間の恋愛感情だとか、ましてや身体だけの関係だとか、そういった雰囲気は一切ないのだ。不倫という言葉がどこまでも不似合いなほどに。

後日、槇野は貴久でなくゆきに確認した。

するとゆきは、あっさりと二人で何度も会っていることを認め、けれど不純な関係ではないと言い切ったのだ。

それを聞いて、ますますどうしようもないような気分させられた。

けっして不倫関係ではないといわれても、周りはそう見ない。バレたら最終的に傷つくのは、ゆきの方だろう。

そう思ったからこそ、何とかしてやりたいと思った。

「いいこと、ね」

ゆきが指先でコーヒークップを遊びながら、槇野の言葉をくり返す。

「せや。既婚者やし、金持ちでもないし、マンション買ってくれるわけでもないやろ？ まあ、優しいんは認めたるけど」

「……『ゆき』って」

「え？」

「貴久さん、『ゆき』って呼んでくれるから」

ゆきは、そう微笑んだ。

それまで作っていたものとは違う、感情の籠もった微笑。

今にも泣き出しそうな、切なそうな、儂い笑み。

「それだけだけど、私にとって、『いいこと』なんだよ？」

時折見せるゆきの笑顔は、いつも痛くて、見ていて癪に障る。

槇野は言いたいことははっきり言うのがポリシーだから、以前に直接そう言ったこともあった。

するとゆきは、また困ったような苦笑を浮かべ、「ごめんね」と一言だけ零したのだった。

「名前で呼んで欲しいなら、俺かて呼んだるがな」

「まっきーじゃ駄目だなあ。『声』が違うし」

「ゼイタクモンが。こんなセクシーヴォイスの槇野様を捕まえておいて」

槇野の台詞に、ゆきはくすくすと微笑った。けれど、どこか虚ろで、目線もあらぬ方向。

誰もいないはずのその方向に、誰かがいるかのように。

「なあ、トエ。おまえ、いつも何処見てんのや？」

「何処って？」

「店長といてても、店長を見てるわけちゃうやろ？」

「貴久さんも、私を見てるわけじゃないよ」

淡く笑みを浮かべて、ゆきはまた甘くないコーヒーを一口飲む。

槇野はただ、溜め息を零すばかりだ。

「まっきー」

「何や？」

「アリガト」

「何の礼やねん、それは」

「ん？ いろいろ」

そう誤魔化すように、ゆきはまた、いつものあの遠くを見るような目で笑った。

遠くの誰かを見るように。

穏やかに、切なげに——嗤った。

#5 Vivid Desire

その名を呼ぶだけで、温かな気持ちに包み込まれる。

ユキはそんな相手なのだと、リツは心の奥底で思っていた。

線が細く頼りなげに見えて、実際はしっかり者で頼りになるのがユキ。

三人兄弟の一番上だからだろうか。同じく三人兄弟でも、末っ子のリツは年下のように扱われてしまうことがよくあった。

だから、余計に……。

「『好き』だとか、今更言えないっつーの」

一人戻ったマンションで、ここにはいない友人に対してのぼやきを、リツは苦笑いとともに零した。

自分の想いなど告げられない。

だからこそ、リツは詞を書くのだ。

歌にしてしまえば、吐き出せない想いを口にしても許されるから。

「ったく、ヨシノはヒトの気も知らないで」

更に愚痴紛いの言葉が口について出るが、ヨシノ自身に悪意があつての発言ではないこともわかつていた。

それは、数日前のライブの打ち上げの時のこと。

ユキとシユウが同時に席を立った瞬間、狙っていたかのように――というよりも狙い澄まして、ヨシノが訊いてきた。「いつから付き合ってたんの?」と。

あまりにもストレート過ぎる問いに、リツは驚くを通り越して笑ってしまった。

「付き合ってたなんかねえよ」

ごく簡潔に答えると、ヨシノは心底驚いた様子で「うそ!」と「マジで?」を何度も繰り返した。

本当だと言ってもなかなか信じてもらえず、二人が戻ってくるま

でしつこく同じ質問を確認し続けたのだった。

ユキは、昔から傍にいた。

お互いに同級生たちとは誰とでも仲良くできる性格であったが、ユキは他の誰よりも気が合ったし、一緒にいて自然体でいられた。

だから、ユキと一緒にバンドをしないかと誘われた時も、ごく当たり前のよう受け入れていた。

自分の友達が、ハルが、ユキを好きだと知るまでは――。

ハルからユキへの想いを打ち明けられた時、リツはひどく戸惑ったことを覚えている。

ハルは、リツもユキを好きなことを知っていたからだ。知っていたからこそ黙っていられたのだと、ハルは申し訳なさに、けれど潔く言い切った。

リツにとつてのハルは当時同性で一番仲が良く、ユキという以外はハルと行動することがほとんどだった。親友だと思えるほど信頼していたし、失いたくはなかった。

だから、気持ちを偽った。「今更、どうこうしようなんて思っていない」と。

恋より友情をとった。そう言ってしまうえば聞こえはいいかもしれない。

けれど、実際はそうではなかった。

リツはユキに想いを告げる勇気が持てず、ただ逃げただけだった。フラれてしまえば、もう隣に立って歌うことすらできなくなってしまうから。

そうなるくらいなら、親友と好きな人との恋路を応援する方が幾らかマシに思えたのだ。

けれど、今になって思えば、それは大きな間違いだったのだと気付いた。

ユキは、ハルの告白を断った。

どんな言葉で断ったのかは知らないが、その日を境にハルのリツに対する態度が変わった。それとなくリツを避けるようになったのだ。

また、ハルとの仲を取り持とうとしたことは、ユキとの関係をぎくしゃくとした居心地の悪いものにさせた。

三人の間に走ったほんの小さな亀裂は、時間の経過とともに埋めがたい大きな溝になっていった。

いつしかバンドは解体し、リツは二人ともと疎遠になったまま卒業を迎えた。

最善だと思った選択は、リツに何も残してはくれなかった。

ユキのバンドを辞めると同時に、リツは歌うことも辞めた。

もちろん、友人たちとの付き合いでカラオケに誘われることもあったが、何かと理由をつけては断り、やむを得ない場合で参加させられても、極力歌わないようにしていた。

否、歌わないのではなく、『歌えなかった』。

マイクを握れば、ユキの優しいギターの旋律が耳に甦る。

歌うことを意識する度に、嫌でもユキと一緒に音を作っていたことを思い出す。

それは当時のリツにとっては苦痛でしかなく、歌から遠ざかるしか逃れる術がなかったのだ。

そんなリツが、ユキと再会したのはいくつもの偶然が重なって生まれたことだった。

バンドなどに縁も興味もないと思っていたゼミの友人——ヨシノが、実は昔から音楽活動を活発に行っていたこと。

そして、ヨシノと一緒にバンド活動をしているのが、ユキと同じ大学に通っているシュウだったこと。

更に、シュウの所属する軽音部にユキが入部し、シュウと意気投

合してしまったこと。

けれど、それだけならば、多分、再会は果たされなかっただろう。三つの偶然が上手く噛み合う為の、大きなきっかけが必要だった。そのきっかけが、リツとヨシノの所属するゼミのコンパの二次会だった。

二次会がカラオケと聞かされて、リツは毎度の如く辞退しようと思っていた。しかし、入学当初からゼミでの世話焼き役になっていたヨシノに強引に却下されてしまったのだ。

リツがあまり積極的に交流しようとしていないのを良しとしなかったのだろう。

強引なヨシノに引きずられるように連れて行かれ、ほぼ無理やり歌わされたのだった。

そんな強制カラオケの途中、さすがに堪え切れなくなったリツは、「明日朝早いから」と嘘をついて逃げ出した。

店を出て、酔っぱらった中年サラリーマンや、大学生同士らしき仲睦まじいカップルとすれ違いながら駅に向かう。

「リツちゃん！」

背後から追いかけてくる声に、リツは反射的に振り返った。ヨシノだ。

連れ戻されるのかと思ったけれど、だからと言って逃げ出すわけにもいかない。

仕方なくその場に立ち止まり、ヨシノが近くに来るまで待つしかなかった。

「あのさ、リツちゃん、明日の夕方暇？」

「え？」

予想していた言葉とは全く違った為、間の抜けた声を洩らしてしまふ。

けれど、ヨシノは妙に力の籠った目でリツを見つめ、表情も真剣そのものだった。

「何か用事あるの？」

「あ、いや、ないけど」

「じゃあ、付き合つて！ 四講目終わつたら、西門前ね！」

「え？ あ、はい」

理由も目的も全く告げられなかったのだが、ヨシノの気迫に圧されて気付けば承諾の返事をしていた。

それを確認すると、ヨシノは満面の笑みを浮かべ、「じゃあ、また明日」と踵を返し、元気よくもと来た道を走り去っていったのだった。

翌日、待ち合わせ通りの時間に西門へと向かうと、ヨシノは既に待ち構えていた。

そのままどこへ行くとも告げられず、辿り着いた先は他大学のキャンパス。

そう、ユキとシウウの通う大学だった。しかし、当時のリツはユキの進学先など知らない為に、再会の可能性など微塵も考えていなかった。

慣れた足取りでヨシノはキャンパス内を横切り、ユキたち軽音部が使用している練習用のスタジオまでリツを連行した。

「ユッキー！ 最高のヴォーカル連れてきたよー！」

スタジオの重い扉も蹴飛ばさんばかりの勢いで、ヨシノは中に入っていく、リツはそんなヨシノに引つ張られて転びそうになりながら、中にいた二人と対面した。

「……リツ？」

「ユ、キ……」

互いに、どうしてここにいるのかと、呆然とするしかなかった。顔を見るのは卒業式以来。言葉を交わすのは、それよりさらに前のバンド解散以来だった。

「え？ ユッキーとリツちゃん、知り合いなの？」

「うん、まあ」

驚き混じりのヨシノの問いに、ユキは齒切れの悪い返答をした。
気まずさを誤魔化すような作り笑顔に、リツは気付かぬうちに詰めていた息を大きく吐き出す。

「幼なじみだよ」

戸惑いを隠せない様子のユキに、リツはできる限りの笑顔を向けた。

けれど、二人の間に流れる空気は、どこか重い。

リツを連れてきた張本人であるヨシノも、ユキと一緒に練習をしていたシユウも、その雰囲気口を挟むことも出来ず、ただ見守るだけだった。

「久しぶり」

「うん。……まだ、歌ってたんだ？」

「もう歌ってないよ。ヨシノ、ちよつとユキ借りていい？」

「あ、うん、どうぞ」

「サンキュ」

ヨシノに短く礼を告げると、リツは躊躇いがちなユキの手を、少し強引に引いて外に出た。たまたま目にとまった、雨風に晒されて色褪せたベンチに腰掛ける。

ユキは、リツの前に立ち尽くしていた。

思ってもみなかった再会はお互い様だというのに、心底困り果てた顔で、ただ立ち尽くす。

「ユキも座れば？」

何とか話の糸口を掴もうと、またも無理やり浮かべた笑顔でユキに向ける。けれど、ユキの表情は冴えないままだった。

「リツ」

「何て顔してんの。何か周りから見たら、ユキを苛めてるように見えるじゃん」

「ごめん」

「いや、謝らなくていいからさ」

「ごめんっ！」

勢いよくユキが頭を下げた。真剣に、心から許しを請うように。何一つ誤魔化さずに。

その謝罪の向けられる先に気づき、リツはようやく笑顔を作るのを辞めた。

何も偽らないユキに、作った笑顔では駄目なのだ。

「ユキ」

「あの時のこと――」

「ユキ、もういいから」

リツは立ち上がり、ユキの柔らかな髪にくしゃと指を絡めた。そのまま少しばかり強引に顔を上げさせる。

あまりにも悲壮な表情をしているユキに、ぷつと小さく吹き出した。

「ヒドイ顔」

「リツ」

「……こつちこそごめん。ユキは何も悪くなかったのに」

「悪くないと言い切れないでしょ。それこそリツは何も悪くないし」

「んじゃ、喧嘩両成敗で謝りっこなし。それでいい？」

リツ自身も強引な決着の付け方だと思った。けれど、そうでもないユキはきつと謝り続けるだろう。

謝罪は、もう要らない。

リツが欲しいものは、そんなものではなかった。

「相変わらず、乱暴なまとめ方するなあ」

くしゃりと、ユキが呆れを含んだ笑顔になった。懐かしい、笑い方。

求めていたものが得られて、リツも自然と破顔する。

「ユキこそ、相変わらず辛気臭く考え過ぎ。そんなんじゃ若いうちにハゲるよ？」

「ハゲません。まったく、リツはいつも適當すぎなんだから……」
そう言いながら、ユキはリツの隣に腰を下ろした。

その距離は、あの頃と変わらない、触れそうで触れない微妙なもの。けれど、それは二人にとっては最も居心地の良い間合いだった。離れていた時間は長かったはずなのに、隣に並ぶとそんな時間などなかったかのように自然で、当たり前で。

欠けていたパズルのピースが、上手くはまったような、そんな感覚。

それでも、まだどこか不完全な気がして仕方がなかった。あと一つ、どうしても足りない、埋まらない部分がある。

その最後のピースは、すぐに見つかった。

空白の時間を埋めるように、それぞれの近況などを話して十数分が過ぎた頃、二人は揃ってスタジオへと戻った。

スタジオの重い鉄のドアを開けると同時に、音が流れ出してくる。ヨシノとシュウ、そしてリツの知らない女性が、ギター片手に歌っていた。

リツの、よく知る歌を。

（ユキの、歌だ）

かつて、ユキのギターでリツ自身が歌った曲を聴いて、眉間に皺が刻まれる。

ユキの作った曲を、見知らぬ人間が歌う不思議さと、不愉快さ。

「違うよ、それ」

気付かぬうちに、リツは口に出していた。言わずには、いらなかった。

驚いたヨシノとシュウの手が、女性の歌が、止まる。

「リツ」

「違うだろ、ユキ。その歌は、そんな風に歌う歌じゃない」

言いながら、まっすぐに女性に向かっていく。彼女はリツの持つ雰囲気気圧されたように、マイクスタンドの前から退いた。

もう何年も遠ざかっていたマイクの前に、リツは自らの意思で再び立つ。

そして、ユキに向けて、一言だけ放った。

「弾いて」

それだけで、充分だった。

ユキは黙ってギターを抱え、いつものポジションに向かう。シューに向かって片手で合図を送ると、カウントが始まった。

耳に馴染んだ優しい旋律に、リツは瞳を閉じ、身を委ねる。

重なる音と音、声と声。

ぴたりと、ピースがはまった。

ようやく、リツは気付いた。

ずっと歌いたかった自分に。

ユキのギターで、ユキの曲を歌いたかった自分に。

すべてのピースが揃ったパズルには、二人並び立って音を作る姿が描かれていたのだった。

そしてリツはこの日、『Weißer Schnee』の正式なヴォーカリストに任命された。

再会を思い返しながら、リツは自室のベッドに身を投げた。

「今更、変えられっかよ」

乱暴に、苦い言葉を吐き捨てる。

ユキへの想いは、今も変わっていない。それどころか、かつてよりももっとずっと、強いだろう。

けれどリツは、その想いを封印するにしたのだ。

あの再会の日に、自ら誓いを立てた。

恋愛感情などがあるから、つまらないイザコザが起きるのだと、

そう思えたから。

そんなことで、ユキとまた離れてしまいたくなかった。

だからただ、ユキの作った歌を、ユキのギターに合わせて歌えれ

ばいい。

それが、リツの一番の望みだった。
何よりも強い、望みだった――。

#6 Sterile Relation

早川が槇野にゆきと貴久の關係に気付いたことを告げてから、数日後。

ほんの少し前まで、店内には大学生らしき女の子の三人組と、互いにスーツ姿のカップルの姿があったが、平日ということもあり早々に店を後にしていた。

今、店内にはゆきと早川の二人きり。槇野は休みで、貴久も一時間ほど前から所用で外に出ていた。

閉店時間までもういくらも時間がないということで、ゆきが表の看板の明かりを落として戻ってくると、早川は思いきって口を開いた。

それは、槇野に口止めをされていたものの、ずっと心に引っ掛かっていたことだ。

「トエちゃん」

「店長とのこと、訊きたいんですか？」

本題を切り出す前にゆきに先回りされてしまい、早川は二の句を告げられなくなってしまった。

そんな早川を見て、ゆきはくすくすと笑いながら、目の前に新しくバーボンのグラスを差し出す。どうやら、ゆきの奢りということらしい。

「早川さん、わかりやす過ぎ」

年下の女の子にそう笑われて、早川は気恥ずかしさを誤魔化すように煙草をくわえた。形勢を立て直す為に、ゆつくりと肺を紫煙で満たしていく。そして溜め息にも思えるような深い息とともにそれを吐き出した。

「いつから？」

簡潔な質問は、それでも意図を過たずゆきに届いた。

ゆきは自分用にアイステイーを作り始めながら答える。

「二人で会うようになったのは、ここで働くよりも前」

「え？　じゃあ」

「違いますよ。ここが貴久さんのお店だと知ったのは、面接に来た時が初めてです」

すごい偶然でしょ、とゆきは苦笑混じりに続けた。

いつもは『店長』と呼ぶゆきが、貴久の名前を当たり前のように口にする姿に、胸の奥がキリと痛んだ。

そして、その面接の時にどんなやりとりがあったのかはわからないが、ごく普通の面接の会話でなかったのは確かだろうと早川は想像する。

それがまた、新たな痛みを生んだ。

「出逢ったのは、冬でした」

少しの沈黙の後、ゆきがおもむろに語り始めた。早川はただ黙ってその続きを待つ。

一口、出来あがったばかりのアイスティーで喉を潤すと、ゆきは懐かしむような表情で続けた。

「私が夜道を歩いてる時に、貴久さんの車に思いっきり泥水をひっかけられたんです。貴久さん、かなり慌てて、お店に持ってくるつもりだったタオル貸してくれたり、家まで送るって言ってくれたり。後から聞いたら、お店に急いであるところだったらしいです」

薄い笑みとともに淡々と話しながら、ゆきはマドラーで意味もなくアイスティーをかき混ぜる。カラカラと、場に似合わないほど涼やかなで軽やかな音が響いた。

「『また会えるかな？』って貴久さんから言われました。でもね、早川さん。それは早川さんが思ってるような意味じゃないんですよ」「俺がアイツの親友だからって気を遣わなくてもいいよ」

「そんなんじゃないです。本当にそうなんです。だって貴久さん、私に指一本触れないんですよ？」

ゆきの告白に、早川は正直驚いた。

それなりの歳の男女が、二人きりで隠れて会っている。しかも、

一般的には「不倫」と呼ばれてしまう関係だ。当然、それなりの行為も発生しているだろうと早川が思ってしまうのも無理もない話だろう。

しかし、ゆきはそれをきっぱりと否定したのだ。

「傍から見れば『不倫』だって言われるのはわかっています。でも、私と貴久さんの関係はそんなじゃないんです。お互い、『男』と『女』って見方じゃないんです」

ゆきの説明を聞いて、早川の中に言い知れぬ感情が湧き上がる。

彼女の言う通りならば、不道德な関係ではないのだろう。

しかし、恋愛感情でもなく、ましてや身体だけの関係でもないとするのなら、この二人は何を求めて一緒にいるのだろうか。

そこには、目に見えない不思議な絆のようなものがあるように感じ、胸中にじわりと嫉妬が滲むのを感じた。

「貴久さん、私のことを『ゆき』って呼ぶでしょう。今の私には、それが大切なことだったりするんですよ」

「『ゆき』って呼んで欲しいなら、俺だって呼ぶよ」
切実な想いでそう伝える。

何も既婚の三十路男でなくてもいいだろうと。

よりによつて、自分の親友でなくてもいいだろうと、本当に心からそう思った。

「まっきーにも同じこと言われました」

「俺は槇野と同レベルか」

ゆきが苦笑に乗せて返した言葉に、早川はますます情けない気分になされた。

早川の落ち込んだ様子に、ゆきは申し訳なさそうに微笑むと、「ごめんなさい」と小さく呟く。

「早川さんが私や貴久さんのことを心配してくれてることはよくわかります。でも、ごめんなさい」

「トエちゃん、俺は——」

「言わないで下さいね」

勢いで気持ちを吐き出そうとした瞬間、静かな、けれど強い響きを持った声に遮られた。

ゆきは作り物めいた笑顔で、早川を見つめていた。

「それ以上は言わないで下さい」

その瞬間、早川はゆきが自分の想いに気付いていることを悟った。それと同時に、早川の想いをゆきが受け入れはしないだろうことも、それくらい完璧に、ゆきは早川との間に線を引いていた。ゆきの笑顔が、ラインを踏み越えることを許さなかった。

「そろそろ店長が戻ってくる頃ですね」

この話はここで終わりだと言わんばかりに、ゆきは話を切り替える。

時計を確認すると、閉店時間はとうに過ぎ、貴久がいつ帰ってきてもおかしくはなかった。

こんな話をした後では貴久と顔を合わせにくいと思い、早川は席を立つ。

じゃあと短い言葉で精算を頼むと、いたたまれない思いを引きずったまま店を出た。ゆきも早川を引き留めようとはしなかった。

通い慣れた道をとぼとぼ歩き出す。十メートルほど離れた頃、後方にある店の駐車場に車が入っていくのに気付いた。上手いタイミングで貴久とすれ違ふことができたようで安堵する。

しかし、この後貴久が店に戻り、ゆきと二人きりになるという事実、再び苦い思いを噛み締めた。

恋でもなく、欲求だけでもない関係。

不毛としか思えないのにそう言い切れないのは、ゆきの言葉から二人だけにしか通じないと思えるような何かを感じたからだろう。

もう一度だけ、早川は店の方角を振り返る。

大きな溜め息が一つ零れた。

やがて、すべてを振り切るように身を翻すと、ゆっくりと歩き出す。

振り返らず、まっすぐに――。

#7 Supreme Love

「おまえらさ、一体いつになったら付き合うの？」

まだ練習を終えて間もない、いつものスタジオ。

いつもならば四人仲良く揃って練習場を後にするのだが、この日はリツとヨシノが私用で先に帰っていた。二人が共通で好きなバンドのライブがあるからだ。

申し訳なさそうに、けれどウキウキとした足取りでスタジオを出ていった二人を笑顔で送り出した後、ユキとシュウは後片付けをしていた。

それがひと段落ついた頃、シュウがポケットから取り出した煙草をくわえながら、突然そんな不躰な質問をぶつけてきたのだ。

ユキは思わず口元に運びかけた缶コーヒーを持つ手を止める。

「何で？」

「何でって、ほとんど付き合ってるようなモンだろ？」

紫煙とともに呆れも吐き出しながら、シュウは重ねて問う。ようやく吸える煙草の味は一際美味しく感じられた。

練習中はユキに喫煙を禁止されている。理由は『リツのノドに悪いから』。

それだけでも、ユキに世界がどれだけリツ中心に廻っているのかがよくわかる。

そして、だからこそその疑問だったのだ。

「リツとは、一生付き合わないかもね」

「は？ だっておまえ、アイツのこと好きなんだろう？」

「うん。片想い歴は長いね」

これだけ尽くしておいて、笑って済ませているユキは正直馬鹿だとシュウは思った。

ユキは、苦笑いでなく普通に笑っている。いつも通り、穏やかに。その笑顔のまま、ユキは「帰ろう」と指先だけでシュウを促した。

戸締りを確認し、狭いコンクリートの階段を上り始める。

「つーか、両想いだろぅが、おまえら」

「そうだね」

予想外の返答に、シュウは階段の途中で足を止めた。

ユキの言い方は、あまりにもあつさりとし過ぎていて、まるで「今日は寒いね」「そうだね」というようなノリだったのだ。

「わかつてんなら——」

「いいんだよ、別に」

「何でだよ」

あまりにも余裕なユキの態度に、ついイラついてしまう。

はつきり言ってしまうえば、見ているシュウからすればもどかしくて堪らないのだ。同じようにヨシノも思っていて、彼女の場合は結構リツにせっついていてるようなので、シュウ自身は静観している風を装ってはいるのだが。

そんなシュウの気持ちを知ってか知らずか、ユキは伏し目がちに微笑んだ。

そこには自嘲と憂いが含まれている。

「リツが臆病になってるのはわかるから……」

「臆病？」

シュウが訊き返すと、困ったような、けれどどこか嬉しそうな表情を向けられる。

リツのことを想うときのユキの笑顔は、他のどんな時よりも優しく、毅然。

「歌バカだからね、アイツ」

「……歌バカはわかるが、おまえの言ってることはさっぱりわからんぞ？」

「シュウはわからなくてもいいの。リツさえわかってればそれでいい」

そう言うてにつこりと満面の笑みを浮かべるユキ。

本当に呆れるくらいリツを大切にしているユキが羨ましくもあり、

それと同時に危機感も覚える。

もし、互いの身に何かあったならば、この二人は壊れてしまうのではないかと……。

「ホントおまえ、リツ至上主義ね」

「うん。当然」

「はいはい。惚気は余所でやってくれ」

心の中に生じた危機感を微塵も出さず、シュウはわざとらしく大仰にため息をついた。

そんな心配は、してみても意味がない。そう知っているから。

「リツの為に……」

「え？」

「リツの為に曲書いて、ギター弾ければ、それだけで十分なんだよ」
「ユキ」

ああ、そうかと、シュウはそこで初めて気づいた。

ユキの書く曲は全てリツの為のもの。だからリツに再会するまでのユキは、いつも誰がどう歌っても納得のいかない表情をしていたのだ。

ユキの曲は、リツが歌わなければ意味がない。

実際、リツが歌うユキの曲は、他の誰が歌うより胸に響いた。

あの日、先輩を退けて歌い出したリツに、シュウは鳥肌が立ったのを今でも覚えている。

ユキがここまでリツを大切にするのもわかるような気がした。

「雪だ……」

外に出て第一声、ユキが小さく呟いた。

大きな牡丹雪が、ふわふわと緩やかに舞っている。

スタジオに入る前とは違い、街はうつすらと白いわたぼうしに包まれていた。それだけで、見慣れた街並みが幻想的に変化するのだから不思議だ。

「うわー、サイアク。とっとと帰ろうぜ」

「やっぱいいよなあ、雪」

「は？」

「いつぺんなつてみたいとか思ったことない？」

ユキの振り向きざまの微笑に、シュウは思い切り脱力感を覚えた。数日前に似たようなやりとりをしたことを思い出したのだ。

「やっぱり、おまえら夫婦だわ」

「何で？」

「リツオもおんなじこと言ってたよ。『雪になつてみてえ』って……」

その言葉を聞いた瞬間、ユキの顔にひととき優しい笑みが生まれる。

その笑顔はきつと、老若男女問わずに見惚れてしまいそうなほど綺麗だ。見慣れているシュウでさえも例外ではない。

そして同時にユキの、リツに対する想いの深さが嫌でもわかる。

「リツ、昔から雪が好きだからね。雪降ると仔犬みたいに駆け回ってたよ」

「仔犬……。ぷっ、アイツらしい」

「可愛いでしょ」

「だから惚気はいって！」

早くくつつけ！ と心の中で毒づきつつ、純粹に二人の幸せを願わずにはいられない。

ユキもリツも、シュウにとっては大切な仲間だから。

「あーあ、雪になりたいなー。……。あ、そうか。雪だ」

「ああもう、今度は何だ？ ほんつと、おまえって突拍子がないっていうか」

「今できた、新しい曲。次の曲は『雪』だよ」

シュウの愚痴まじりの言葉も全く聞こえていないのか、ユキは自信に満ちた表情で空を見上げる。

きつと、今のユキの頭の中には、リツにどんな風に歌ってもらおうかとか、リツならばどう歌ってくれるのだろうかとか、そんなことばかりで一杯なのだ。

「……作曲馬鹿」

ぼそりとシュウは呟く。心の中では「作曲」の前に「リツ専用」という言葉を付け加えて。

聞こえるかどうか微妙な大きさの声は、それでもしっかりとユキの耳に届いていたらしい。「最高の褒め言葉だね」と、屈託のない笑みとともに返った。

その笑顔は、シュウにとって忘れられないものになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3645z/>

Song for Snow

2011年12月19日09時51分発行